

# 勝善寺の飛び石



脚本：鈴木 勇太郎 作

絵：坂本 康子 作

編集：NPO法人富浦エコミューズ研究会

表紙

『勝善寺の飛び石』

脚本.. 鈴木 勇太郎 作

絵.. 坂本 康子 作

編集.. NPO法人エコミューゼ研究会

勝善寺の飛び石





むかし、むかし、老師と呼ばれる、えらい坊さんがおりました。

老師は山からおりて、村人たちに、ありがたい、みほとけの慈悲じひの心をときながら、村人たちのこまる川には橋をかけ、道のないところには道をつくり、

また、病人には薬をあたえ、身寄りのない老人には、手あつい看護かんごをされましたから、

村人たちは、老師のことを「生きぼとけ仏さま」と呼んでそんけいしていました。



①



8

しかし、江戸時代の天正八年（一五八〇）に峰の寺が火事になったため、老師は山のふもとの字、あざ天正屋敷に仮堂を建てて、一時、住むことになってしまいました。それを知った村人たちが大ぜい集まって、相談しました。

そして、

「生き仏ぼとけさまの家を建てようじゃないかと、お金を出し合って、



②

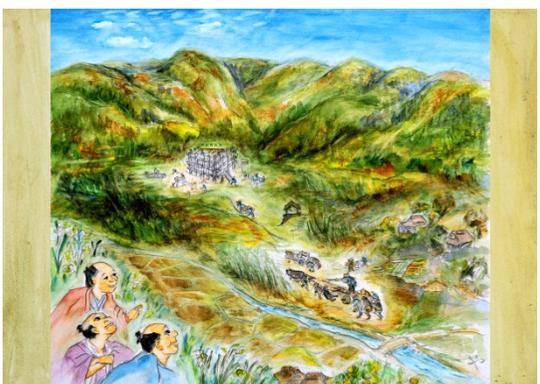


富山の北のふもとの台地に工事を始め  
ました。

くわをふるう人、土を運ぶ人、巨大な松  
や檜の材木が、遠くの村々からも、たいへ  
ん、たくさん寄進されました。

仕事を手伝う人数もしだいに多くなっ  
てきました。

まず、城普請しろぶしんのように高い足場が組み  
立て、しき石が置かれ、柱が立ち、屋根がふ  
かれます。



③



村じゅうの人々が力を合わせ、数えて三年目に新しい寺（今の勝善寺）が完成し、盛大な落成の式が行われることになりました。

いろいろな造花にかざられた新しいお寺には、領主をはじめ、村々の名主たちが集まってきました。

木立の中の鐘楼では、朝、早くから村びとの手で、ゴーン、ゴーンとよるこびの鐘がつかれ、式は、天正屋敷の老師を迎えることから始まり、沿道には、一目、ひとめ老師を見ようと、黒山の人だかりで、大いににぎわいました。





きらびやかな行列が、やっとお寺につくと、今まで晴れていた空が急に暗くなって、ポツン、ポツンと雨が降り出してきました。遠くの雷鳴が、しだいに近くなってきました。かみなり

パツと、強い稲妻が、縦に横に走ったかと思うと、人びとは、天のさけるような、はげしい音を聞きました。その時です。

「石だ、石だ。石が空から降ってくる。」

誰かの叫び声と同時に境内を逃げ回る人びとの上へ、岩のような大きな石が、うなりを立てて、次つぎに落ちてくるのです。





老師は本堂の縁先えんさきに立ち、手を合わせ、静かにお経を読まれますが、清らかな目には、なぜか涙が光っていました。

かみなり雷鳴は止んで、再び、木のあいだから日の光がのぞいてきました。

村人の話では、山の寺の周りの石が、老師に別れを惜しんで、あとをしたって飛んで来たのだと言われています。今もその石は、勝善寺の裏庭に、小山のように積み上げられています。

房州の、旧富山町、勝善寺の飛び石伝説は、今も村びとたちの話題にのぼることがあるそうです。

